エリザベトあて1645年8月4日付の手紙と『方法序説』第三部における「道徳」の説明の対応関係

髙　原　照　弘

エリザベトあて1645年8月4日付の手紙は、デカルトが「幸福な生」とその実現について自分自身の見解を展開した文章である。その中でデカルトは一つの「道徳」（行為・生活の規則）を提示し、説明している。エリザベトあて1645年8月4日付の手紙は、デカルトが自分で考案した一つの「道徳」を説明した文章と見なすことができる。

本稿で言う「道徳」とは、フランス語の女性名詞moraleの訳語である。本稿で「道徳」という語を用いる時には、すべてmoraleという語の代わりに用いている。

デカルトの「道徳」（morale）と言う時、それはどのようなことを指すのか。

二つの場合が考えられる。一つは、デカルトによる行為・生活の規範についての理論・思想、を指す場合。もう一つは、デカルトの考案した行為・生活の規範を成す規則の総体、を指す場合。二番目の意味の「道徳」は、一番目の意味の「道徳」に含まれ、その要素となる。

本稿は、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙の中で提示される二番目の意味の「道徳」（すなわち、行為・生活の規則）とその説明（どのように説明されているか）を考察対象とする。

周知のとおり、デカルトは、『方法序説』第三部においても、自分が考案した一つの「道徳」（行為・生活の規則）を提示し、説明している。

エリザベトあて1645年8月4日付の手紙における「道徳」の説明と『方法序説』第三部における「道徳」の説明とを比較・対照してみるならば、二つの文章における「道徳」が相似していることのみならず、二つの文章における「道徳」の説明の順序と内容に一対一の対応関係があることがわかる。

エリザベトあて1645年8月4日付の手紙における「道徳」と『方法序説』第三部における「道徳」との関係については、両者の相違に注目して、デカルト自身の学問研究の進展の結果、後者が前者に言わば進化した、と結論づけるのが、現在の定説であるように思われる[1)]。

二つの文章における「道徳」に大小さまざまな相違があることは明白である。しかし、本稿では、二つの「道徳」が、根底では、同じ「道徳」であること、また、それだけではなく、二つの文章において「道徳」が提示され、説明される、その仕方が、表面上の相違にもかかわらず、根底において全く同じであることを明らかにしてみたい。

本稿における考察の出発点は、二つの「道徳」の相違、あるいは、相似をどのように論じるかではなく、あくまで、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙をどのように読み解くかである。不正確になるのを承知で、あえて平俗な言い方をするならば、「エリザベトあて1645年8月4日付の手紙は、『方法序説』第三部と全く同じパターンで書かれている」ということを明らかにしてみたい。

「同じパターンで書かれている」とは、具体的にはどのようなことか。

エリザベトあて1645年8月4日付の手紙は、九つの段落から成る[2)]。冒頭の第1段落と末尾の第9段落を除いて、この手紙の主要部をなす第2段落から第8段落までは、上にも述べたように、デカルトが考案した一つの「道徳」の説明となっている。この部分が、『方法序説』第三部における「道徳」の説明と「同じパターンで書かれている」というのは、二つの文章における「道徳」の説明に、一対一に対応する共通の順序と内容が見出される、ということである。

本稿では、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙と『方法序説』第三部における「道徳」の説明に、共通の順序と内容が見出され、それらが一対一に対応していること、また、二つの文章における「道徳」自体にも、一対一に対応する共通の順序と内容が見出されること、を明らかにして示してみたい。

二つの文章で提示される「道徳」（行為・生活の規則）に、一対一に対応する共通の順序と内容が見出されるならば、それは一つの「メタ道徳」を抽出することになるだろう。

また、二つの文章における「道徳」の説明に、一対一に対応する共通の順序と内容が見出されるならば、それは、その「メタ道徳」を含む一

つの「道徳」（行為・生活の規範についての理論）を抽出することになるだろう。（これは、冒頭で述べた、一番目の意味の「道徳」である。）八年余りをへだてて書かれた二つの文章から抽出されたこの「道徳」を、デカルトが長年保持していた一つの基本的な「道徳」と見なすことができるのではないか。

以上が、本稿における考察により解明されるべきことがらである。

本稿における考察の手順は次のとおりである。

まず、「1. 二つの文章における一対一対応」において、二つの文章における「道徳」の説明に共通して見出される順序と内容、および、二つの文章で提示される「道徳」に共通して見出される順序と内容を、それぞれ箇条書きにして掲げる。これらは、二つの文章における「道徳」の説明を比較・対照しながら読み解くことから抽出された、説明の型（パターン）と規則の型（パターン）であり、本来は比較・対照および読解の作業の結果として提示されるものであるが、それを、読解の作業に先立ち、提示する。

次に、「2. 『方法序説』第三部における「道徳」の説明」、「3. エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙における「道徳」の説明」において、「1. 二つの文章における一対一対応」に掲げた二つの文章に共通する「説明の型」および「規則の型」と、二つの文章の間での対応関係とを念頭に置いて、二つの文章それぞれの「道徳」の説明を読み解く。

本稿における考察は、まず、二つの文章における一対一の対応関係を仮説として提示し、次に、二つの文章それぞれの読解により、その仮説を検証するという手順を踏んでいる。本稿は、仮説の提示と読解による検証作業の記録であると言える。

1. 二つの文章における一対一対応

エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙における「道徳」の説明と『方法序説』第三部における「道徳」の説明とに共通して見出される順序と内容は、次のとおりである。

まず、「幸福に生きること」が、目的として提示される。

次に、目的を実現するために守るべき三つの規則が提示される。

最後に、理性をよく用いて「よく判断すること」（«bien juger»）ができるようになること、すなわち、判断力の養成と、そのための学問研究の重要性が強調される。

二つの文章のそれぞれにおいて、「道徳」の説明は、上のような三部構成になっている。

また、二つの文章において提示される「道徳」の三つの規則が命じることにも、共通した順序と内容が見出される。

まず、第一の規則は、常に最善の行為を選び出すこと、を命じる。

次に、第二の規則は、自分が選び出した行為を完全に実行すること、を命じる。

最後に、第三の規則は、自分の力の及ばないものごとについての欲望を放棄すること、を命じる。

直上に掲げたのは、二つの文章における「道徳」から抽出された言わば「メタ道徳」である。この「メタ道徳」について若干の説明を補足しておこう。

第一・第二の規則は、行為を選択し、実行する過程において、第一・第二の順に守るべき二つの規則として一組をなす。第一と第二の規則を守ることにより、常に最善の行為を完全に実行すること、言い換えれば、常に自分の最善を尽くすことが可能となり、満足した精神状態が獲得・保持される。

満足した精神状態を獲得し、保持すること。これがデカルトの考える「幸福に生きること」である。このことは、エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙の中で明言されているが、『方法序説』第三部では、少なくとも明示的には、語られていない。

第三の規則は、第一・第二の規則に付け加えられたもので、第一と第二の規則を守ることにより獲得・保持される満足した精神状態を損なわないために守るべき規則である。

二つの文章で提示される「道徳」は、それらの表面上の相違にもかかわらず、根底においては、このような「規則の型」を共有している。

上に掲げた「説明の型」と「規則の型」とは、すでに二つの文章にお

ける「道徳」とその説明を比較・対照しながら読み解くことによって抽出されたものであるが、それらを適用して二つの文章それぞれにおける「道徳」の説明を分析することにより、それらの妥当性を明らかにして示してみたい。

2.『方法序説』第三部における「道徳」の説明

『方法序説』は、デカルトが40歳の頃、執筆された。この文章においてデカルトは、自分が若き日に学問研究を志し、それをその時点まで続行してきた過程を描き出している。

『方法序説』第三部では、第二部から引き続き、いわゆる「炉部屋」（«poêle»）での「思索」（«pensées»）の内容が語られるが、その中でデカルトの考案した一つの「道徳」（行為・生活の規則）が提示され、説明される。

2－1.「幸福に生きる」という目的の提示

『方法序説』第三部の冒頭、デカルトは「道徳」の説明を次のように始める。

> 理性が私に判断において不決断でいることを命じることになる間、私が行為において不決断でいることのないために、そして、私が、それでもなお、その時から直ちにできるかぎり幸福に生きるために、私は自分のため暫定的に一つの道徳を作り上げた。それは三つないし四つの格率から成るに過ぎないものだったが、それを披露してみたい[3)]。

ここでは、自分の持っている知識や意見を理性を用いて再検討すると同時に、「私が自分自身に定めた方法」（«la Méthode que je m'étais prescrite»）[4)] に従って理性を用いることの修練を積むにあたり、自分自身のために「一つの道徳」（«une morale»）を作り上げた目的が二つ挙げられている。

一つは、実生活において行為の選択が困難にならないようにすること。もう一つは、そのようにすることによって、自分に可能なかぎり「幸福

に生きること」（«vivre［…］heureusement»）。一つ目は、二つ目の手段であるから、結局、「幸福に生きること」が、この「道徳」の目的に定められている。

『方法序説』第三部では、冒頭から「道徳」の説明が始まり、上に引用した箇所で、「幸福に生きること」が「道徳」の目的として提示される。

2－2. 三つの規則の提示

次に、「幸福に生きる」という目的を実現するために守るべき三つの規則として、いわゆる「暫定的道徳」[5] の三つの「格率」（«maximes»）が提示され、説明される。

各「格率」には、その後に説明が続いているが、「格率」だけを取り出して掲げるならば、次のようになる。

> 第一は、私の国の法律と慣習とに従うこと。また、私が神の恩恵により子供の時からその中で教育された宗教を変わることなく持ち続けること。そして、他のすべてのことにおいては、私がともに生きていくことになる人々の中の最も良識ある人々に、実践において広く受け入れられている、最も穏健で、極端から最も離れた意見に従って自分を導くこと、であった[6]。

> 私の第二の格率は、行為においてできるかぎり確固決然としていること。そして、最も疑わしい意見にも、ひとたびそのように決意したならば、それが極めて確かなものであった場合と同様、変わることなく従うこと、であった[7]。

> 私の第三の格率は、常に、運命よりもむしろ私自身に打ち勝つように、また、この世界の秩序よりも私の欲望を変えるように、努めること。そして一般に、次のように信じることに自分を慣らすこと、であった。すなわち、完全に私たちの力の内にあるものは、私たちの思考〔精神活動〕の他には何もないということ。それゆえ、私たちの外のものごとについて最善を尽くした後には、それでもうまくいかないことはすべて、私たちには絶対に不可能であるというこ

と[8)]。

これら三つの「格率」は、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙の第4段落でデカルト自身が言っているように、その手紙の第5・第6・第7段落で提示される三つの規則に対応している。しかも、それは一対一の対応である。この対応関係に注目するならば、三つの「格率」が命じることを次のように解釈することができる。

まず、第一の「格率」は、「常に最善の行為を選び出すこと」を命じていると見なされる。

第一の「格率」については、その内容の保守性を取り上げるのではなく、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙における「道徳」の第一の規則との共通点を考える時には、第一の「格率」を守ることが、与えられた状況で「常に最善の行為を選び出すこと」を可能にする、とデカルトが考えている点に注目するべきである。

「炉部屋」での「思索」の時点では、デカルトは、自分の持っている知識や意見を理性を用いて再検討することを企図しており、それらに信を置くことができない。

また、自分が考案した「方法」（«la Méthode»）に従って理性を用いることの修練をまだ十分に積んではいないので、行為の選択において、自分自身で判断して最善の行為を選び出すことを意図的に停止する。

これはデカルトが、学問研究の過程で、意図として自分自身に設定した状況であり、『方法序説』第三部の冒頭、「理性が私に判断においてそのようである〔不決断でいる〕ことを命じることになる間」と言われているのは、このような状況を指している。

自分の判断力の行使についての状況がこのようである期間は、この規則を守ることが、生活のあらゆる状況において、最善の行為を選びとることを可能にする、とデカルトは考える。

次に、第二の「格率」について。

第二の「格率」は、行為の選択に際しての決断と、自分が選び取った行為を迷うことなく実行すること、とを命じている。

しかし、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙における「道徳」の第二の規則との共通点を考える時には、「自分が選び出した行為を完全に実行すること」を命じていると見なされる。

最後に、第三の「格率」について。

第三の「格率」は、「運命」(«la fortune») と「この世界の秩序」(«l'ordre du monde»)に従うこと、および、「私たちの力の内」にあるものごとと「私たちの外のものごと」とを区別し、自分の力の及ばないものごとの獲得あるいは実現は、すべて自分には「絶対に不可能」(«absolument impossible»)であると見なすことに自分を慣らすこと、を命じている。また、デカルトが、この規則の中で、「完全に私たちの力の内にあるものは、私たちの思考〔精神活動〕(«pensées»)の他には何もない」と言っている点も注目に値する[9)]。

しかし、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙における「道徳」の第三の規則との共通点を考える時には、第三の「格率」は、「自分の力の及ばないものごとについての欲望を放棄すること」を命じていると見なされる。

2－3. 判断力の養成と学問研究――その重要性の強調

1) 学問研究の重視

三つの「格率」を説明した後、デカルトは、この「道徳」の「締めくくり」(«conclusion»)として、「炉部屋」での「思索」の時点で定めた当面の生活方針を提示し、説明している。この箇所が、『方法序説』第三部における「道徳」の説明において、「理性をよく用いて「よく判断すること」(«bien juger») ができるようになること、すなわち、判断力の養成と、そのための学問研究の重要性が強調される」箇所である。

デカルトは、三つの「格率」の説明に続けて、当面の生活方針を次のように提示している。

> 最後に、この道徳の締めくくりとして、私は、人々がこの生においてたずさわっているさまざまな仕事を見直し、最もよいもの［仕事］を選びとることに努めようと思った。そして、他人の仕事については何も言うつもりはないが、私にできる最善は、私がたずさわっていたまさにその仕事を続けること、すなわち、私が自分自身に定めた方法に従って、私の理性を育成し、真理の知識においてできるかぎり前進することに私の生のすべてを用いること、であると考えた[10)]。

ここで提示される生活方針は、自分が志した「仕事」（«occupation»）を続けることであり、それは、学問研究に全力を尽くすということである。

ここで言う「仕事」（«occupation»）とは、生（生活・人生）における主要な活動、すなわち、自分の時間と労力を主としてそのために用いる、生（生活・人生）における中心的活動、を意味する。デカルトは、学問研究を自分の「仕事」（«occupation»）として選びとり、それを続行した[11)]。

上の引用の中でデカルトは、自分の学問研究の内容を、「私が自分自身に定めた方法に従って、私の理性を育成し、真理の知識においてできるかぎり前進すること」と言い表している。これは、判断力の養成と真の知識の獲得を、自分が考案した「方法」（«la Méthode»）に従って行い、進めていくことを意味する。

『方法序説』におけるデカルトの学問研究は、二つの精神活動から構成される。一つは、「私の理性を育成すること」（«cultiver ma raison»）、すなわち、自分の理性のはたらきを向上させること。もう一つは、「真理の知識においてできるかぎり前進すること」（«m'avancer, autant que je pourrais, en la connaissance de la vérité»）、すなわち、あらゆるものごとについて真である知識を順次、獲得していくこと。

デカルトは、『方法序説』第一部冒頭部で、「よく判断し、真と偽とを区別する能力」（«la puissance de bien juger, et distinguer le vrai d'avec le faux»）を「良識」（«le bon sens»）あるいは「理性」（«la raison»）と呼んでいる[12)]。デカルトによれば、この能力は、すべての人に生まれながら平等にそなわっている。また、これは、人間を他の動物から区別する、人間に固有の能力である。しかし、人は、生まれながら理性がそなわっているだけでは、「よく判断すること」（«bien juger»）、すなわち、的確に判断すること、ができるとはかぎらない。「よく判断する」ためには、理性をよく用いること、すなわち、理性を適切に用いること、が必要である[13)]。

『方法序説』のフルタイトル、すなわち、「自分の理性をよく導き、諸学問において真理を探究するための方法についての叙説」（*Discours de la Méthode pour bien conduire sa raison et chercher la vérité dans les*

sciences）に言い表されているように、理性をよく用いるためには、「方法」に従って理性を用いることが必要であり、かつ、諸学問において、理性をよく用いて、真である知識を獲得することを積み重ねることにより、理性のはたらきを向上させていくことができる。

このように、デカルトの学問研究では、判断力の養成と真の知識の獲得という二つの精神活動が、デカルトが考案した「方法」（«la Méthode»）に従って行われ、同時に進められていく。

三つの「格率」に続いて説明される生活方針は、デカルトが、自分の「道徳」について、「三つないし四つの格率から成るに過ぎない」と言っていることに照らし合わせて、第四の「格率」と見なされることがある[14)]。しかし、デカルトが定めた生活方針を第四の「格率」と見なして、そのように呼ぶ場合でも、それを先立つ三つの「格率」と同列に扱うことはできない。三つの「格率」は、行為・生活について判断・意志・欲望を律する規則である。それに対して第四の「格率」は、自分の生（生活・人生）の時間と労力を何のために用いるかについての方針であり、決意表明であるとも言える。

2）学問研究から得られた満足感

「道徳」の「締めくくり」（«conclusion»）として提示された当面の生活方針にも、三つの「格率」と同様、説明が続いている。生活方針を提示した後、すぐに続けてデカルトは次のように言っている。

> この方法を用いることを始めてからというもの、私はこの上ない満足を常々体験してきていたが、それは、それより甘美な満足も、また、それより清浄な満足も、この生において享受できるとは思われなかったほどである。そして、それ〔方法〕を用いて毎日いくつかの真理（それらは十分に重要であるのに他の人々には一様に知られていないと思われた）を発見することで、そのことから得られる満足が私の精神を完全に満たしていたので、その他のすべては私の心を動かさなかった[15)]。

ここで述べられているのは、「方法」に従って思考を進め、次々に「真理」を発見していく作業（デカルトが志した「仕事」、すなわち、学

問研究の初期の段階と考えられる）から得られた快い満足感についてであるが、この箇所についても、エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙との対応を指摘することができる。

デカルトは、エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙の第 8 段落で、「理性の正しい使用」を身につけるためになされる「研究」（«étude»）（これが『方法序説』における学問研究に対応する）について、「人が望みうる最も有用な仕事（occupation）」であると言った後に、それは同時に「最も快く最も甘美なもの［仕事］」でもあると言っている。『方法序説』第三部の上の引用箇所は、エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙の末尾近くのその箇所と対応していると考えられる。

3）学問研究と判断力の養成

さらに続けて、デカルトは次のように言っている。

> そして、そもそも先の三つの格率も、私の持っていた学ぶことを続ける企図に基づくものでしかなかった[16)]。

三つの「格率」が、「学ぶこと」（«m'instruire»）、すなわち、学問研究を続ける「企図」（«le dessein»）を土台とし、その上に打ち立てられたものでしかなかったとは、どのようなことを考えて言われているのか。

続く説明を読むならば、デカルトが「学ぶこと」、すなわち、学問研究を続行する目的を、「よく行う（よく行為する）」（«bien faire»）ために「よく判断すること」（«bien juger»）ができるようになることに定め、三つの「格率」を、自分自身で「よく判断すること」ができるようになるまでの、暫定的な性格の規則と考えていることがわかる。

上の引用に続けて、デカルトは第一、第二の「格率」について次のように言っている。

> というのも、神は私たち一人一人に、真と偽とを識別するためのいくばくかの光を与えて下さったのだから、私は一瞬たりとも他人の意見で満足しなければならないとは思わなかっただろう―もし、時期が来れば、私自身の判断力を用いてそれらを検討するつもりでなかったならば。また、それらに従う際、良心のためらいから逃れる

すべがなかっただろう—もし、それがために、もっと良い意見がある場合に、そのような意見を見出すいかなる機会をも失うことはない、と思わなかったならば[17]。

最も良識ある人々に共有されている最も穏健で中庸を得た意見に従うことを命じる第一の「格率」について、将来においてそのような「他人の意見」を自分自身の「判断力」（«jugement»）を用いて検討する意図を持っていたと言われている。

また、自分が選びとった意見に堅固な意志をもって従うことを命じる第二の「格率」については、「他人の意見」に従って行為するに際しても、他方で、より良い意見を見つけ出す意図を常に持っていた、ということが言われている。

どちらについても、そのような意図の実現を可能にする判断力を身につけること、すなわち、「よく判断すること」ができるようになることをデカルトが目的として持っていたことが読み取られる。

さらに、自分の力の及ばないものごとについての欲望の放棄を命じる第三の「格率」について、デカルトは次のように言っている。

そしてさらには、私には私の欲望を制限することも、満足していることもできなかっただろう—もし、私が一本の道をたどっているのでなかったならば。その道により、私に可能なすべての知識の獲得が約束されていると思われたが、同様にして、およそ私の力の及ぶすべての真の善の獲得も約束されていると私は思っていた。というのも、私たちの意志は、いかなるものごとをも、私たちの知性が良いあるいは悪いと提示するのに従ってしか、追求も忌避もしようとしないのだから、よく行うためにはよく判断すれば十分であり、そしてまた、自分の最善を尽くすためには（すなわち、獲得することのできるすべての徳を獲得し、同時に、他に獲得することのできるすべての善をも獲得するためには）、できるかぎりよく判断すれば十分であるからである。そして、そのようになっていると確信される時、人は必ずや満足していられるのである[18]。

学問研究を「一本の道」（«un chemin»）をたどることにたとえて、

その道をたどることにより、自分が獲得できるすべての知識を獲得することが確信され、同時に、自分が獲得できる「すべての真の善」（«tous les vrais biens»）を獲得することも確信されたと言われている。

「真の善」とそうでないものごととの識別は、「知性」（«entendement»）のはたらき、特に、その一つである「理性」（«raison»）のはたらきによってなされるが、その識別を的確に行うことをデカルトは「よく判断すること」（«bien juger»）と言っている。「真の善」を獲得するためには、「よく判断すること」ができるようになることが必要である。

それゆえ、上の引用箇所から読み取られるのは、学問研究を続けることにより、知識が獲得され、同時に「よく判断すること」ができるようになり、その結果、「よく行うこと（よく行為すること）」（«bien faire»）ができるようになるという考えであり、デカルトが、「よく判断すること」ができるようになることを学問研究の目的に定めていることがわかる。

以上の分析から明らかなように、三つの「格率」に続いて提示された当面の生活方針とその説明は、『方法序説』第三部における「道徳」の説明の中で、「理性をよく用いて「よく判断すること」（«bien juger»）ができるようになること、すなわち、判断力の養成と、そのための学問研究の重要性が強調される」箇所となっている。

3. エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙における「道徳」の説明

デカルトは、エリザベトにあてた 1645 年 7 月 21 日付の手紙の中で、「セネカが「幸福な生について」書いた本」（«celui［= le livre］que Sénèque a écrit *de vita beata*»）を読んで、所見・考察（«considérations», «remarques»）を手紙でやりとりすることを提案していた[19]。

エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙は、この提案に続いて始まる。

> 私がセネカの「幸福な生について」の本を選び、殿下にお喜びいただけるような対話の材料としてご提案申し上げた時、私は著者〔セネカ〕の名声と主題の重要性のみに目を向け、著者が主題をど

のような仕方で論じているかに十分注意を払いませんでしたが、それをその後見直しましたところ、従うに値するほど適切なものとは思われません。しかしながら、それについて殿下に、より容易にご判断いただけるように、私はここで、この主題が、信仰の光に照らされず、自然的理性しか導き手を持たなかった彼のような「知恵の愛求者〔哲学者〕」によって、どのように論じられるべきであったと思われるかをご説明することに努めます[20)]。

デカルトは、セネカの主題の論じ方を適切ではないと評価している[21)]。そしてセネカのような「知恵の愛求者〔哲学者〕」（«un Philosophe»）の立場でならば、「幸福な生」（«*vita beata*»）という主題をどのように論じるべきであったと思われるかを説明すると言っている。

セネカは、この手紙の第9段落でデカルトが言うように、「異教の知恵の愛求者〔哲学者〕」（«un Philosophe païen»）である。セネカのような「知恵の愛求者〔哲学者〕」の立場とは、キリスト教信仰を持たず、「自然的理性」（«la raison naturelle»）のみを「導き手」（«guide»）として真理を探究し、それによって知られる真理を知ることにとどまる立場である。

上に掲げた冒頭第1段落で、デカルトは、この手紙において、セネカと同じ立場に立ち、セネカに代わって「幸福な生」という主題を論じる意図を表明している。

しかし、第2段落以下、デカルトがセネカの「幸福な生」についての見解を取り上げることはない。デカルトは、この手紙では、セネカが主題とした「幸福な生」とその実現について、専ら自分自身の見解をエリザベトに説明する。

第2段落から第8段落で展開されるのは、「幸福な生」とその実現についてのデカルト自身の見解であるが、それは、デカルトが考案した一つの「道徳」（行為・生活の規則）の説明と見なすことができる。

すでに述べたように、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙と『方法序説』第三部とを比較・対照するならば、二つの文章における「道徳」の説明の順序と内容に一対一の対応関係が見出される。

この対応関係に注目してエリザベトあて1645年8月4日付の手紙の第2段落から第8段落までの内容を分析するならば、この手紙における

「道徳」の説明が次のように構成されていることがわかる。

まず、第２段落・第３段落において、「「幸福に生きること」が、目的として提示される」。

次に、第４段落から第７段落において、「目的を実現するために守るべき三つの規則が提示される」。

最後に、第８段落において、「理性をよく用いて「よく判断すること」（«bien juger»）ができるようになること、すなわち、判断力の養成と、そのための学問研究の重要性が強調される」。

以下、各段落の内容を分析して、この手紙における「道徳」の説明の構成を確認してみたい。

３－１.「幸福に生きる」という目的の提示

エリザベトあて 1645 年８月４日付の手紙では、第２段落・第３段落において、「「幸福に生きること」が、目的として提示される」。

1)「幸福に生きる」とは（第２段落）

第２段落で、デカルトは、セネカの言う «*vivere beate*»（「幸福に生きる」）とはどのようなことかを問う。

A. Ernout et A. Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine* によれば、beatus という語の原義は、「富で満たされた、必要なものすべてを持っている、望むものは何もない」（«comblé de biens, ayant tout ce qu'il lui faut, n'ayant rien à désirer»）ということであったと推定されている。そこから、人やものについて「富んだ」（«riche»）という意味と、道徳的意味として「しあわせな、幸福な」（«heureux, bienheureux»）という意味が生じ、この最後の意味で教会用語にとり入れられたという[22)]。

デカルトは、セネカの言う «*vivere beate*» をフランス語で言い表すにあたり、«heur» に由来する heureusement を用いて «vivre heureusement» と言うことをしりぞけ、«vivre en béatitude» と言い表し、それは「完全に満足した精神を持つこと」（«avoir l'esprit parfaitement content et satisfait»）に他ならないと言明する。

デカルトは、«heur» と «béatitude» を次のように区別する。

«heur» は、ただ、「われわれの外のものごと」（«［ les ］choses qui

sont hors de nous»）[23] だけに依存する。それゆえ、自分で獲得を意図して獲得したのではないのに、何らかの「善」（«bien»）を獲得することになった人々について、その人々を «heureux» と評価する。

他方、«béatitude» は、「完全な精神的満足、内面的な満足」（«un parfait contentement d'esprit et une satisfaction intérieure»）から成り、「運命」（«la fortune»）に最も恵まれた人々でもそのような満足を持つとはかぎらないが、「知者」（«les sages»）は「運命」とは関係なく、それを獲得する。

heur は、ラテン語 augurium（占い、予兆、予言の意）が変化して生じた語であるが、古フランス語の時代から十七世紀まで、「運」（«chance»）、特に「幸運」（«bonne chance»）の意で用いられた[24]。

フュルティエールの辞書（1690 年刊）は、heur に「有利なめぐりあわせ。」（«Rencontre avantageuse.»）という語義を与えている（与えられた語義は、この語義のみである）[25]。また、アカデミー・フランセーズの辞書（1694 年刊）も、heur の語義として「幸運。」（«Bonne fortune.»）と記している（語義は、この語義のみ）[26]。

しかし、heur に bon が付いて形成された bonheur や、heur から派生した heureux, heureusement については、いささか事情が異なる。

bonheur は、十五世紀には、「完全に満たされた意識の状態」（«état de la conscience pleinement satisfaite»）という意味でも用いられるようになっていた[27]。

heureux については、「幸福を享受している」（«Qui jouit du bonheur.»）という意味の用例が十三世紀の初めから見出されるという[28]。

また、heureusement は、「幸福な状態で」（«Dans l'état de bonheur.»）という意味の用例が 1557 年に確認されている[29]。

vivre に heureusement を付けた用例を、モンテーニュの『エセー』から二つ引用する。

> C'est ce que dict Epicurus au commencement de sa lettre à Meniceus: Ny le plus jeune refuie à philosopher, ny le plus vieil s'y lasse. Qui faict autrement, il semble dire ou qu'il n'est pas encores saison d'heureusement vivre, ou qu'il n'en est plus saison.

(Montaigne, *Essais*, Livre I, Chapitre XXVI.)[30]

訳：エピクロスもメノイケウスあての手紙の冒頭で言っております。最も若い者も知恵の愛求を避けてはならず、最も老いた者もそれに倦むことがあってはならない。そのようにしない者は、まだ幸福に生きる時期ではないだの、もはやその時期ではないだの、言っているようなものだ、と。(モンテーニュ『エセー』第一巻第二十六章)

Il n'est rien, dict Cicero, si doux que l'occupation des lettres […] ce sont elles qui nous fournissent dequoy bien et heureusement vivre, et nous guident à passer nostre aage sans desplaisir et sans offence. (Montaigne, *Essais*, Livre II, Chapitre XII.)[31]

訳：キケローは言っている。学問にたずさわることほど甘美なことは何もない［中略］われわれによく生きるため幸福に生きるための手段を与え、そして人生を悩みもなく苦しみもなく過ごすことへわれわれを導くのは学問だ。(モンテーニュ『エセー』第二巻第十二章)

これら二つの引用中の «heureusement vivre» は、「幸運」に恵まれて生きることを意味するのではなく、「運命」のいかんにかかわらず、「知恵の愛求者」(«philosophe») が理想として、その実現のために努力する生（生活・人生）のあり方を言い表している。

デカルトは、『方法序説』第三部冒頭の段落で、自分自身のために「一つの道徳」(«une morale») を作り上げた目的を «vivre […] le plus heureusement que je pourrais» と言い表していた[32] が、この «vivre […] heureusement» も、上に掲げたモンテーニュの二つの用例と同じ意味で用いられていたのであり、「幸運」に恵まれて生きることを意味するのではない。

béatitude は、教会ラテン語 beatitudo (「天上の幸福」(«bonheur céleste»)) から借用された語で、13 世紀に用例が見出されるという。beatitudo という語は、古典ラテン語（キケロー）でも、「完全な幸福」(«bonheur parfait») という意味で用例が見られるが、あまり用いられ

る語ではなかったらしい[33]。

セネカの『幸福な生について』の全文[34] に目を通しても、beatitudo の語は、ただの一度も登場しない。セネカは、«*vivere beate*» のあり方・状態を言い表す語として、beatitudo ではなく、felicitas を用いている[35]。

トマス・アクィナスは、『神学大全』第二・一部第一問題から第五問題において、人間の「究極目的」(«ultimus finis») である「幸福」(«beatitudo») について論じている[36]。

トマスによれば、人間にとっての「究極目的」は神であるが、神の「獲得」すなわち神への「到達」(どちらも «adeptio» の訳である) もまた人間の「究極目的」と見なされ、この後者の「究極目的」が「幸福」(«beatitudo») と呼ばれる。

「幸福」は、神の「観照」(«contemplatio») すなわち神の「直観」(«visio») にあるが、人間は、「この生において」(«in hac vita») は、「完全な幸福」(«perfecta beatitudo») すなわち「真の幸福」(«vera beatitudo») には到達できない。

人間が現世において、自分の「自然的性質」(«naturalia») を通して獲得できるのは、「幸福の何らかの分有」(«aliqualis beatitudinis participatio») である「不完全な幸福」(«beatitudo imperfecta») に過ぎず、それは、「観照的知性」(«intellectus speculativus») および「実践的知性」(«intellectus practicus») の「徳」(«virtus») に従った「活動」(«operatio», «actus») にあるが、それらは、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』で論じている、「知的徳」(«virtus intellectualis») に従った「観照的生活」(«vita contemplativa») と「倫理徳」(«virtus moralis») に従った「実践的生活」(«vita activa») に相当する[37]。

デカルトは、キリスト教思想における beatitudo (「天上の幸福」) を念頭に置きつつ、現世において人間の自然的性質・能力によって獲得されるかぎりでの、«beatus» という形容詞が表現する人間のあり方・状態を «béatitude» と言い表している。

トマス・アクィナスは、このような人間のあり方・状態を「不完全な幸福」(«beatitudo imperfecta») と評価したが、デカルトは、この手紙の第 9 段落では、これを «béatitude naturelle» と呼んでいる。

2)「幸福な生を実現するもの」(第 3 段落)

第３段落で、デカルトは、「幸福な生を実現するもの」（«*quod beatam vitam efficiat*»）は何かを問い、「われわれにこの最高の満足をもたらすことができるものごと」（«les choses qui nous peuvent donner ce souverain contentement»）を二種類挙げる。

> すなわち、徳や知恵のように、われわれ次第のものごとと、名誉や富や健康のように、われわれ次第ではないものごと[38)]

「われわれ次第のものごと」（«de celles qui dépendent de nous»）と「われわれ次第ではないものごと」（«de celles qui n'en dépendent point»）という区別は、エピクテートスの『要録』（*Manuel*）Ⅰの冒頭で述べられていることを思い起こさせる。

それに従えば、われわれの精神活動は、われわれ自身が生み出すものごとであり、われわれ次第であるが、身体、富、名声・名誉、地位・権力は、われわれ自身が生み出すものごとではなく、われわれ次第ではない[39)]。

『方法序説』第三部における「道徳」の第三の「格率」に照らし合わせても、「徳」（«la vertu»）と「知恵」（«la sagesse»）は、「私たちの思考〔精神活動〕」（«nos pensées»）であるので、「完全に私たちの力の内に」ある。すなわち、「徳」と「知恵」は、そのあり方、あるいは、はたらかせ方が、われわれ自身の努力により決定する。

それに対して、「名誉」（«les honneurs»）・「富」（«les richesses»）・「健康」（«la santé»）は、「私たちの外のものごと」と見なされ、自分の力が完全には及ばないものごとである。これらをどれだけ所有できるかは、「運命」（«la fortune»）次第である。

デカルトは、第２段落で、「幸福に生きる」ことを、「運命」とは関係なく獲得される「完全な精神的満足、内面的な満足」から成る «béatitude» の内に生きることと定めた。

にもかかわらず、なぜ、第３段落で、「幸福な生を実現するもの」として、「徳」・「知恵」に加えて、「運命」に依存する「名誉」・「富」・「健康」を取り上げたのか。

デカルトは、「徳」・「知恵」を同じようにそなえているのであれば、「名誉」・「富」・「健康」にも恵まれた者は、恵まれない者よりも、「より

完全な満足」（«un plus parfait contentement»）を享受できる、という理由を挙げているが、このことからは、「徳」・「知恵」が「幸福な生」を実現し、「名誉」・「富」・「健康」が「幸福」の内容をよりよいものにする、という考えを読み取ることが可能である。

アリストテレスは、「幸福」を、人間の「卓越性〔徳〕」に基づく「魂」の「活動」と定義した[40]が、そのような「魂に関する善」である「幸福」の実現には、「身体に関する善」と「外的な善」とが付け加わる必要があると考えている[41]。

デカルトが、「幸福な生を実現するもの」として、「徳」・「知恵」に加え、「名誉」・「富」・「健康」を挙げた時、「幸福」の実現には、「魂に関する善」に加えて、「身体に関する善」と「外的な善」も必要であると考えるアリストテレスの見解が念頭にあった可能性がある。

しかしながらデカルトは、最終的に考察対象を、各人の努力により、それだけで実現可能な精神的満足に限定する。

第３段落は、「道徳」の説明の中では、回り道になった感が否めないが、この段落で、「幸福な生を実現するもの」として「徳」（«la vertu»）と「知恵」（«la sagesse»）とが明示されたことは重要である。

デカルトは、第２段落・第３段落で、「幸福に生きること」（*«vivere beate»*, «vivre en béatitude»）を「道徳」の目的として提示したが、デカルトの考えでは、「幸福に生きること」とは、「完全に満足した精神を持つこと」に他ならない。

それゆえ、満足した精神状態の獲得・保持が「道徳」の目的となる。

３－２．三つの規則の提示

エリザベトあて 1645 年８月４日付の手紙では、第４段落から第７段落において、「目的を実現するために守るべき三つの規則が提示される」。

第４段落は、「道徳」の規則の提示に先立つ導入部であり、第５・第６・第７段落で、三つの規則が一つずつ提示される。

まず、第４段落では、三つの規則の提示に先立ち、それらが各人が自力で満足した精神状態を獲得・保持することを目的としていること、また、『方法序説』の中で提示された「三つの道徳規則」（«les trois règles de morale»）、すなわち、三つの「格率」が、この手紙において提示される三つの規則に対応していること、が明言されている。

次に、第５段落で、第一の規則が、また、第６段落で、第二の規則が提示される。

> 第一に、生のあらゆる状況において、何をするべきか、するべきでないかを知るために、精神をできるかぎりよく用いるように常に努めること[42]。

> 第二に、情念や欲求に妨げられることなく、理性が勧めることをすべて実行する固く変わらぬ決意を持つこと[43]。

先に述べたとおり、この手紙で提示される三つの規則が命じることと、『方法序説』第三部で提示された三つの「格率」が命じることには、共通した順序と内容が見出される。

この手紙の第一の規則は、常に自分で的確に判断して、行為の善悪を弁別することを命じているが、『方法序説』第三部の第一の「格率」との共通点を考える時には、「常に最善の行為を選び出すこと」を命じる規則であると見なされる。

また、第二の規則は、堅固な意志を保持して、自分が善いと判断したことをすべて実行することを命じているが、『方法序説』第三部の第二の「格率」との共通点を考える時には、「自分が選び出した行為を完全に実行すること」を命じる規則であると見なされる。

デカルトは、第二の規則に続けて、「徳」（«la vertu»）について自分の意見を述べている。そこでデカルトは、第二の規則が命じる「固く変わらぬ決意」（«une ferme et constante résolution»）を指して、「この決意の固さ（«fermeté»）」こそが「徳」（«la vertu»）としてとらえられるべきであると言っている。

この手紙で提示される「道徳」だけを考察対象とするならば、第一・第二の規則について、次のような解釈も可能である。

第一の規則は、行為の善悪の弁別にあたり、精神をよく用いる、言い換えれば、知性、とりわけ理性をよく用いることを命じる規則である。また、第二の規則は、行為の実行に際して、堅固な意志を保持することを命じる規則である。これらは、それぞれ、知性と意志のはたらかせ方について、あるいは、「知恵」（«la sagesse»）と「徳」（«la vertu»）につ

いての規則である。第一・第二の規則をこのように解釈することもできる。

しかし、この手紙における「道徳」と『方法序説』第三部における「道徳」との対応関係、特に、二つの「道徳」のそれぞれにおける三つの規則が命じることの共通点を考える時には、上に述べたように、第一の規則は、「常に最善の行為を選び出すこと」を、また、第二の規則は、「自分が選び出した行為を完全に実行すること」を命じる規則であり、第一と第二の規則を守ることによって、常に最善の行為を完全に実行すること、言い換えれば、常に自分の最善を尽くすことが可能となり、満足した精神状態が獲得・保持される、と考えるべきである。

さらに、第７段落で、第三の規則が提示される。

> 第三に、このようにできるかぎり理性に従って自分を導く一方、それでも所有できないすべての善は、どれも同等に全く自分の力の外にあると考え、そして、そのようにして、それらを望まないことに自分を慣らすこと[44]。

この規則の言う「このようにできるかぎり理性に従って自分を導く」とは、第一と第二の規則を守って生活することを意味する。第一と第二の規則を守って生活するならば、常に最善の行為を完全に実行する、すなわち、常に自分の最善を尽くすことが可能となり、自分が獲得することのできるすべての善を獲得することができる。

第三の規則は、「自分の力の及ばないものごとについての欲望を放棄すること」を命じる規則であり、この規則を守ることにより、第一と第二の規則を守ることによって獲得・保持される満足した精神状態が損なわれることを避けることができる。

第三の規則にすぐに続けて、デカルトは次のように言っている。

> と申しますのも、欲望、そして心残りあるいは後悔の他には、われわれが満足しているのを妨げうるものは何もないからです[45]。

「欲望」（«le désir»）の実現が自分の力の内にある、すなわち、自分の力で可能である場合には、欲望を実現することにより、新たに満足し

た精神状態が獲得される。しかし、欲望の実現が自分の力の外にある、すなわち、自分の力では不可能である場合には、第三の規則を守ることにより、満足した精神状態が損なわれることを避けなければならない。

「心残り」（«le regret»）と「後悔」（«le repentir»）について、デカルトはどのように考えているか。

「心残り」（«le regret»）について、デカルトはこの手紙では何も説明を加えていない。デカルトが『情念論』第209項で情念（passion）としての「心残り」（«le Regret»）について述べていること[46]に基づくならば、「心残り」（«le regret»）とは、過去に享受したが、すでに失われ、取り戻す望みが全くない「善」（biens）についてわれわれが抱く感情である。このような「善」（biens）は、自分の力の外にあるから、第三の規則を守り、それらについての欲望を放棄することにより、「心残り」が生じて満足した精神状態が損なわれるのを防ぐことができる。

「後悔」（«le repentir»）については、デカルトは、上に引用した文に続けて、次のように言っている。

> しかし、もしわれわれが常に、われわれの理性がわれわれに命じることをすべて行うならば、われわれには決して後悔する理由はないでしょう―そのあとで、その結果から、われわれが間違えたことがわかることがあっても。なぜなら、それはわれわれの落度によるのではないからです[47]。

「もしわれわれが常に、われわれの理性がわれわれに命じることをすべて行うならば」とは、第一と第二の規則を守って生活することがそれにあたる。第一と第二の規則を守って生活するかぎり、常に自分の最善を尽くすことになり、それゆえ、「われわれには決して後悔する理由はない」と言うことができる状況となる。

しかし、各人が、たとえ日常的かつ長期的に判断力の養成に努力するにしても、生活のある時点・ある状況における判断力は、必然的に完全なものではありえず、それゆえ、最善の行為を選び出し、完全に実行しても、行為のあとで、誤りであった、すなわち、そのように行為するべきではなかったと新たに判断されることは起こりうる。この点についてデカルトは、「それはわれわれの落度（faute）によるのではない」とい

う理由で、後悔するにあたらないと考える。

3－3. 判断力の養成と学問研究――その重要性の強調

第８段落では、「理性の正しい使用」（«le droit usage de la raison»）を身につけることの重要性が強調される。第８段落は、「道徳」の説明において、「理性をよく用いて「よく判断すること」（«bien juger»）ができるようになること、すなわち、判断力の養成と、そのための学問研究の重要性が強調される」部分である。

すでに述べたように、デカルトにとって理性とは、「よく判断し、真と偽とを区別する能力」である。理性をよく（＝適切に）用いることにより、「よく（＝的確に）判断すること」が可能となる。「理性の正しい使用」とは、判断力の養成に努力することにより到達を目指す、理性の適切な用い方の理想を、このように言い表していると考えられる。

> 理性の正しい使用は、善について真の知識をもたらすことで、徳が偽りのものとなるのを防ぎ、また、徳と許容される快楽との折り合いをつけさえして、徳の使用を大変容易にし、さらには、われわれにわれわれの本性のあり方を知らしめることで、欲望を大いに制限します。それゆえ、人間の最大の幸福はこの理性の正しい使用にかかっているということ、したがって、それを身につけるためになされる研究は、人が望みうる最も有用な仕事であり、また、間違いなく、最も快く最も甘美なものでもあるということを認めなければなりません[48)]。

ここでは「理性の正しい使用」の効用が三点挙げられている。第一に、「善について真の知識をもたらすことで、徳が偽りのものとなるのを防ぐ」こと。第二に、「徳と許容される快楽との折り合いをつけさえして、徳の使用を大変容易にする」こと。第三に、「われわれにわれわれの本性のあり方を知らしめることで、欲望を大いに制限する」こと。

これらはそれぞれ、行為の善悪の弁別、「徳の使用」（つまり、堅固な意志をもって行為を実行すること）、欲望の制限にかかわることであるが、この手紙における「道徳」の三つの規則と一対一に対応している。

先にも述べたように、この手紙における「道徳」の三つの規則が命じ

ることは、それぞれ次のとおりである。（ここでは、『方法序説』第三部の三つの「格率」との共通点を考えるのではなく、この手紙における「道徳」の三つの規則だけを考察対象としている。）

第一の規則は、「常に自分で的確に判断して、行為の善悪を弁別すること」を命じる。

第二の規則は、「堅固な意志を保持して、自分が善いと判断したことをすべて実行すること」を命じる。（この規則を守る際に保持しなければならない堅固な意志を、デカルトは「徳」（«la vertu»）と見なすのであった。）

第三の規則は、「自分の力の及ばないものごとについての欲望を放棄すること」を命じる。

これら三つの規則を守って行為し、生活する際、それぞれについて「理性の正しい使用」が効力を発揮する。

第一の規則については、行為の善悪の弁別において誤ることなく判断を下すため（ひいては、あらゆる状況において、どのように行為するのが最善であるかを誤ることなく判断するため）には、「理性の正しい使用」が必要である。

第二の規則については、堅固な意志を保持する、すなわち、「徳の使用」にあたり、「許容される快楽」（«les plaisirs licites»）の見極めが「理性の正しい使用」によって可能となり、規則が実践に即したものとなる。

第三の規則については、自分の力で可能なことと不可能なこととの見極めが、「理性の正しい使用」により可能となる。

上の引用文の中でデカルトの言う「人間の最大の幸福（félicité）」とは、完全に満足した精神状態でいることに他ならない。「道徳」の三つの規則を守り、満足した精神状態を獲得・保持して生きるためには、「理性の正しい使用」が不可欠である。そこでデカルトは、「それ〔理性の正しい使用〕を身につけるためになされる研究（étude）」は、「人が望みうる最も有用な仕事（occupation）」であると言い、さらに、「最も快く最も甘美なもの〔仕事〕」でもあると言っている。

この「理性の正しい使用」を身につけるためになされる「研究」（«étude»）が、デカルト自身がたずさわってきた学問研究に結びつけられ、そのような学問研究を指して言われているのであろうことは容易に

推測される。また、『方法序説』第三部における「道徳」の説明との対応関係を考慮に入れれば、そのことは一層明確になる。

『方法序説』第三部で述べられていたように、デカルトの学問研究では、判断力の養成と真理の知識の獲得とが同時に進められていく。それゆえ、「理性の正しい使用」を身につけるためになされる「研究」は、同時に、あらゆるものごとについて真の知識を順次獲得していく「研究」でもある。

デカルトは、『哲学の原理』仏訳（1647年公刊）に付けた序文では、自分がたずさわってきた学問研究を「知恵の愛求〔哲学〕」（«la Philosophie»）としてとらえ直し、その本質・手順・内容を説明している。その文章の冒頭部でデカルトが述べていることによれば、«Philosophie» という語は、「知恵を愛し求めること」（«étude de la Sagesse»[49]）を意味するが、「知恵」（«la Sagesse»）とは、「ことをなすにあたっての思慮」（«la prudence dans les affaires»）であると同時に、人間が知りうるあらゆるものごとについての「完全な知識」（«une parfaite connaissance»）でもある[50]。

デカルトの見解では、「知恵」は、実践的判断力とあらゆるものごとについての知識から構成される。言い換えれば、「知恵」とは、あらゆるものごとについて知識を持っていて、行為・生活の実践において「よく判断すること」ができる精神のあり方である。「知恵の愛求〔哲学〕」とは、このような「知恵」を身につけるため、すなわち、精神をそのようなあり方に変えていくため、になされる精神活動である。

これらのことを考え合わせるならば、「理性の正しい使用」を身につけるためになされる「研究」（«étude»）とは、「知恵を愛し求めること」（«étude de la Sagesse»）すなわち「知恵の愛求〔哲学〕」（«la Philosophie»）に他ならないことが明らかになる。

結論

以上、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙と『方法序説』第三部における「道徳」の説明の対応関係を明らかにして示した。二つの文章における「道徳」の説明に共通して見出される順序と内容、また、二つの文章における「道徳」の三つの規則に共通して見出される順序と内

容は、「1. 二つの文章における一対一対応」で示したとおりである。

本稿における考察により、何が解明されたのか。

第一に、エリザベトあて1645年8月4日付の手紙（の主要部分）が、『方法序説』第三部（における「道徳」の説明）と「同じパターンで書かれている」ということ。1637年の『方法序説』公刊後、八年を経て書かれた個人あての手紙に、『方法序説』の一部分と「同じパターン」が用いられたということは、そのこと自体が興味深い。ここで言う「同じパターン」とは、叙述における共通の順序と内容を指す。

第二に、デカルトが長年にわたり保持していたと考えられる、「幸福に生きること」とその実現についての最も基本的で、最も単純な見解が明らかになったということ。繰り返しをいとわずに掲げるならば、その内容は、次のとおりである。

「幸福に生きること」は、三つの規則を守ることにより実現される。

第一に、常に最善の行為を選び出すこと。第二に、自分が選び出した行為を完全に実行すること。第三に、自分の力の及ばないものごとについての欲望を放棄すること。

第一と第二の規則を守ることにより、常に最善の行為を完全に実行すること、すなわち、常に自分の最善を尽くすことが可能となり、満足した精神状態が獲得・保持される。これが「幸福に生きること」である。

第三の規則は、第一・第二の規則に付け加えられたもので、第一と第二の規則を守ることにより獲得・保持される満足した精神状態を損なわないために守るべき規則である。

三つの規則を守るにあたっては、「徳」（la vertu）と「知恵」（la sagesse）とが要求される。「徳」は堅固な意志であり、「知恵」は判断力と知識の結合であるが、「知恵」を身につけるためには、「知恵の愛求〔哲学〕」（la philosophie）を実践する必要がある。

それゆえ、「幸福に生きる」ためには、「知恵の愛求〔哲学〕」を実践しなければならない。

単純平明な見解ではあるが、常に最善の行為を完全に実行することを命じる二つの規則に、自分の力の及ばないものごとについての欲望の放棄を命じる第三の規則を加えて、三つの規則を定めた点、および、満足した精神状態の獲得・保持を「幸福に生きること」と見なす点は、デカルトの特徴であり、上の見解を、デカルトが長年保持していた基本的な

一つの「道徳」（行為・生活の規範についての理論）と見なすことができる。

最後に、このデカルトの基本的な「道徳」と、エピクロスが「メノイケウスへの手紙」の中で語っていることとの間に、親近性が見出されることについて付言したい。

エピクロスの「メノイケウスへの手紙」の冒頭では、「幸福に生きる」ために「知恵の愛求〔哲学〕」を実践することの必要が明言されている[51)]。

また、エピクロスは、「快楽」を「幸福な生」の「始まり〔動機〕」にして「終わり〔目的〕」と考え、「快楽」として身体の健康と「心の平静」を挙げている[52)]が、デカルトは、最善の行為を完全に実行して獲得・保持される満足した精神状態を「快楽」（«plaisir»）と見なし[53)]、「精神の平静」（«la tranquillité de son âme»）と呼んでもいる[54)]。

デカルトは、ストア派と同じく、「徳に従うこと」（«suivre la vertu»）[55)] あるいは「徳の実践」（«l'exercice de la vertu»）[56)] を「最高善」と見なすが、彼の「道徳」（行為・生活の規則）は、「幸福に生きること」すなわち「快楽」の獲得・保持を目的に定めているので、ストア派の倫理学からは離反する。

デカルトの「道徳」（行為・生活の規則）とその説明に、ストア派の倫理学の影響が認められることは、本論の中（の注）で指摘したが、デカルトが保持していた根底的で基本的な「道徳」（行為・生活の規範についての理論）は、その本質においては、エピクロスの倫理学説を受け継いでいるのではないか。

デカルトとエピクロスとの関係については今後の課題としたい。

註

1） 現在、この問題を考察する際、考察の基礎となる最重要の文献は、次の論文であろう。Jean-Marie Beyssade, «Sur les "trois ou quatre maximes" de la morale par provision», in G. Belgioioso et *al.*（éd.）, *Descartes: Il metodo e i Saggi*, Rome, 1990, pp.139–153. 日本では、山田弘明氏がご自身で訳された『方法序説』に付けた詳しい解説の中で、おそらくベイサッドの見解を踏まえたうえ、ご自身の見解を述べておられる。『方法序説』、山田弘明訳、ちくま学芸文庫、2010 年、pp.155–158.

2） 本稿における考察にあたり、エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙

をはじめ、デカルトの文章はすべて、*Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, réédition, Vrin-CNRS, 11 vol., 1964–1974（AT と略記）に収められたものを用いる。参照箇所・引用箇所は、AT の巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示す。引用する際には、読みやすさの便宜を図り、他の諸版も参考にして、表記を現代つづりに改めて掲載する。

3） *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 22.

4） *Discours de la Méthode*, 2e partie, AT, VI, 22 et 3e partie, AT, VI, 27.

5） デカルトが『方法序説』第三部で提示した「道徳」は、「暫定的道徳」（«la morale provisoire»）と呼び慣わされている。la morale provisoire という語は、例えば、次に挙げる書物の中で用いられている。René Descartes, *Discours de la Méthode*, texte et commentaire par Étienne Gilson, Vrin, 1925; 6e éd., 1987. Geneviève Rodis-Lewis, *La Morale de Descartes*, PUF, 3e éd., 1970. Henri Gouhier, *Descartes, Essais sur le «Discours de la méthode», la métaphysique et la morale*, Vrin, 3e éd., 1973. Descartes, *La Morale*, textes choisis et présentés par Nicolas Grimaldi, Vrin, 1992.

6） *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 22–23.

7） *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 24.

8） *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 25.

9） 第三の「格率」には、ストア派の倫理学の影響が顕著にあらわれている。ジルソンは、『方法序説』の注釈本の中で、エピクテートスの『語録』（*Entretiens*）および『要録』（*Manuel*）、セネカの『幸福な生について』、ユストゥス・リプシウスの『ストア哲学への手引き』（Juste Lipse, *Manuductio ad stoicam philosophiam*）、との対照を指示している。René Descartes, *Discours de la Méthode*, texte et commentaire par Étienne Gilson, Vrin, 1925 ; 6e éd., 1987.

10） *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 27.

11） デカルトは、『方法序説』第一部冒頭部では、自分が「仕事」（«occupation»）として続行してきた学問研究を指して、「真理の探究」（«la recherche de la vérité»）と呼んでいる。*Discours de la Méthode*, 1ère partie, AT, VI, 3. また、デカルト自身の学問研究を指して、「学ぶ（こと）」（«m'instruire»）という語も、『方法序説』全体で 5 回、用いられている。P.-A. Cahné, *Index du* Discours de la méthode *de René Descartes*, Edizioni dell'Ateneo Roma, 1977.

12） *Discours de la Méthode*, 1ère partie, AT, VI, 2.

13） 『方法序説』の中で、「理性をよく用いる（こと）」という日本語に相当する表現が用いられている箇所は、次の一箇所だけである。「この方法について私が最も満足していた点は、それ〔この方法〕によって、私が、す

べてにおいて自分の理性を、完全にではないにしろ、少なくとも私にできるかぎり、よく用いていると確信していられたことであった。」(『方法序説』第二部) «ce qui me contentait le plus de cette méthode, était que, par elle, j'étais assuré d'user en tout de ma raison, sinon parfaitement, au moins le mieux qui fût en mon pouvoir», *Discours de la Méthode*, 2e partie, AT, VI, 21. しかし、『方法序説』第二部に登場する「われわれの理性の完全な使用」(«l'usage entier de notre raison», AT, VI, 13.) や、エリザベトあて 1645 年 8 月 4 日付の手紙の末尾に近い第 8 段落で説明される「理性の正しい使用」(«le droit usage de la raison», AT, IV, 267.) は、理性をよく用いることの理想の表現であると考えられる。

14) 例えば、ベイサッド、山田弘明、アルキエが、第四の「格率」というとらえ方をしている。Jean-Marie Beyssade, *op. cit.* 山田弘明前掲書 pp.154–156、Descartes, *Œuvres philosophiques*, éd. par Ferdinand Alquié, Classiques Garnier, tome I, p.597, n.1. また、グイエは、著書の中で、第四の「格率」というとらえ方をした過去の研究について言及している。Henri Gouhier, *op. cit.*, p.244, n. 5.

15) *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 27.

16) *Ibid.*

17) *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 27–28.

18) *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 28.

19) Descartes à Elisabeth, 21 juillet 1645, AT, IV, 252–253.

20) Descartes à Elisabeth, 4 août 1645, AT, IV, 263.

21) デカルトはセネカの主題の論じ方のどのような点を批判しているのか。セネカの文章の内容(「幸福な生」についての見解)を批判しているのか、それとも形式(修辞・文体)を批判しているのか。デカルトは、この手紙に続いてエリザベトにあてた 1645 年 8 月 18 日付の手紙の中で、セネカの「論じていること」(«ce qu'il traite») の欠点を具体的に述べることになる。

22) A. Ernout et A. Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine, Histoire des mots*, 1932; 4e éd., 3e tirage augmenté d'additions et de corrections nouvelles par Jacques André, Klincksieck, 1979, p.69.

23) この表現は、ストア派の倫理学に由来すると推測される。『方法序説』第三部における「道徳」の第三の「格率」の中でも、「私たちの外のものごと」(«les choses qui nous sont extérieures») という表現が用いられていた。エピクテートスの『要録』(*Manuel*) の中に、現代のフランス語訳によれば、«les choses du dehors», «les choses extérieures» という表現が見出される。普通の人間は「(自分の) 外のものごと」に執着するが、「知恵の愛求者」(«philosophe») は自分自身の (精神の) 修養に専心する、という文脈で登場している。Épictète, *Manuel*, XIII, XXIX, 7, XLVIII, 1. *Les*

Stoïciens, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1962. また、セネカの『幸福な生について』第 8 章 3–4 節にも、「（自分の）外のものごと」（«externa»）という表現が見出され、そこでも、「（自分の）外のものごと」への執着を離れ、自分自身の（理性の）修養に専心するべきである旨が述べられている。Reynolds, L. D., *L. Annaei Senecae Dialogorum Libri Duodecim*, Oxford, 1977, p.174.

24） *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction de Alain Rey, Dictionnaires LE ROBERT, 1992, pp.1713–1714.

25） *Dictionnaire universel* d'Antoine Furetière, 1690, article «HEUR».

26） *Dictionnaire de l'Académie Françoise*, 1694, article «HEUR».

27） *Le Grand Robert de la langue française*, éd. augmentée, Dictionnaires LE ROBERT, 2001, article «BONHEUR». *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction de Alain Rey, Dictionnaires LE ROBERT, 1992, p.1714.

28） *Le Grand Robert de la langue française*, éd. augmentée, Dictionnaires LE ROBERT, 2001, article «HEUREUX». *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction de Alain Rey, Dictionnaires LE ROBERT, 1992, p.1714.

29） *Le Grand Robert de la langue française*, éd. augmentée, Dictionnaires LE ROBERT, 2001, article «HEUREUSEMENT». *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction de Alain Rey, Dictionnaires LE ROBERT, 1992, p.1714.

30） Montaigne, *Les Essais*, Livre I, éd. Villey-Saulnier, PUF, 2e éd. «Quadrige», 1992, p.164.

31） Montaigne, *Les Essais*, Livre II, éd. Villey-Saulnier, PUF, 2e éd. «Quadrige», 1992, p.489.

32） *Discours de la Méthode*, 3e partie, AT, VI, 22.

33） *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction de Alain Rey, Dictionnaires LE ROBERT, 1992, p.360.

34） AD GALLIONEM DE VITA BEATA, Reynolds, L. D., *L. Annaei Senecae Dialogorum Libri Duodecim*, Oxford, 1977, pp.167–197.

35） *Ibid.*, p.168, p.183.

36） *Summa Theologiae*, Prima Secundae, QQ.1–5. St Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, Latin text and English translation, Introductions, Notes, Appendices and Glossaries, Blackfriars, Cambridge, vol.16, 1969.

37） *Summa Theologiae*, Prima Secundae, QQ.57,58,60,69. St Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, Latin text and English translation, Introductions, Notes, Appendices and Glossaries, Blackfriars, Cambridge, vol.23, 1969 and vol.24,

1974.

38） Descartes à Elisabeth, 4 août 1645, AT, IV, 264.

39） Épictète, *Manuel*, I. *Les Stoïciens*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1962, p.1111. Marc-Aurèle, *Pensées pour moi-même suivies du Manuel d'Épictète*, Flammarion, GF, 1964, p.207.

40） アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、高田三郎訳、第一巻第七章、岩波文庫、上巻、1971 年、p.33。同書、第十巻第七章、岩波文庫、下巻、1973 年、p.173。

41） 同書、第一巻第八章、岩波文庫、上巻、1971 年、p.39。岩田靖夫、『アリストテレスの倫理思想』、岩波書店、1985 年、pp.40–42。セネカは、『幸福な生について』の中で、「幸福な生」とは「徳」（«uirtus»）を堅持して生きることと考える立場から、「幸福に生きる」ためには「徳」を所有するだけで十分であると断言しながら（第 16 章）、他方、そのような生活を実践する「知者たち」（«sapientes»）が、「無記のものごと」（«indifferentia»）の内、「富」・「健康」などの「好ましいものごと」（«potiora»）を所有し、享受することがあっても、彼らの言行に矛盾はないと主張している（第 21 章・第 22 章）。AD GALLIONEM DE VITA BEATA, Reynolds, L. D., *L. Annaei Senecae Dialogorum Libri Duodecim*, Oxford, 1977, p.183, pp.188–189.

42） Descartes à Elisabeth, 4 août 1645, AT, IV, 265.

43） *Ibid.*

44） Descartes à Elisabeth, 4 août 1645, AT, IV, 265–266.

45） Descartes à Elisabeth, 4 août 1645, AT, IV, 266.

46） *Passions de l'âme*, AT, XI, 484–485.

47） Descartes à Elisabeth, 4 août 1645, AT, IV, 266.

48） Descartes à Elisabeth, 4 août 1645, AT, IV, 267.

49） étude はラテン語 studium に由来し、studium は動詞 studere から派生した語であるが、studere には、ものごとに愛着を持つ、ものごとを望む、求める、ものごとのために手間をかける、などの意味があり、studium にも、ものごとに熱心に取り組むこと、熱意、愛着、という意味がある。フランス語 étude も、古くは、ラテン語が持っていたそのような意味を保持していたという。*Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction de Alain Rey, Dictionnaires LE ROBERT, 1992, p.1336. デカルトは、ラテン語の著作では、studium の語を用いているが、フランス語 étude を用いる際にも、studium の持つ意味を念頭に置いて用いていると考えられる。

50） *Les Principes de la Philosophie, Lettre de l'Auteur à celui qui a traduit le Livre*, AT, IX–2, 2.

51） Épicure, «Lettre à Ménécée», dans Diogène Laërce, *Vies et doctrines des*

philosophes illustres, X, *Les Épicuriens*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2010, p.45.

52) *Ibid.*, p.47.

53) Descartes à Christine de Suède, 20 novembre 1647, AT, V, 85.

54) *Passions de l'âme*, Art. 148, AT, XI, 442.

55) Descartes à Elisabeth, 18 août 1645, AT, IV, 277. *Passions de l'âme*, Art. 148 et Art. 153, AT, XI, 442 et 446.

56) Descartes à Elisabeth, 6 octobre 1645, AT, IV, 305. *Passions de l'âme*, Art. 148, AT, XI, 441.